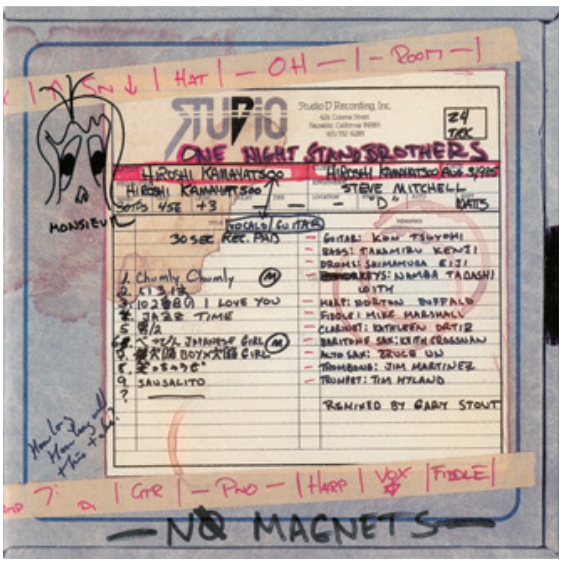
Music

僕を音楽の世界に引き戻してくれた一枚
『ワン・ナイト・スタンド・ブラザーズ』

Text: George Cockle
文／ジョージ・カックル



George & Monsieur Kamayatsu in San Francisco

今ではすっかり音楽通で売っている（？）僕だが、実は音楽から離れたときがあった。ラジオも聞かず、レコードも買わなかった。それは80年代。全部とはいわないが、80年代に発売されたほとんどの音楽は僕のハートをすり抜けていった。音楽シーンはビデオが盛んで、ファッション的になっていた。そして音楽自体がすごく冷たくなっていた。僕の好きなナチュラルな音から離れていた。イーグルスは解散していたし、あの西海岸を代表するアメリカもインスピレーションがなくなっているみたいだった。その頃、空気が動かない最新のコンピュータードラムが流行っていて、リズムはプロツールスというコンピューターのプログラムを使って完璧になっていた。人間が持っている自然な揺れや、ノリがなくなっていた。ドラムやベースのビートはまるっきり同じに揃えられていた。そしてギターの音、歌のピッチまで揃っていた。しかし音程こそあっていたが、そこには魂がなかった。

そんな時代の中、かまやつひろしと彼の仲間達は自然な味のレコードを作りに、当時僕が住んでいたカリフォルニアにやってきた。ムッシュはナチュラルな、ライブ感があるレコードを求めていた。それを作るために大きなひと部屋のスタジオを借りた。そのスタジオはサウサリートというサンフランシスコ湾に面している街にあった。当時のサウサリートは昔ながらのヒッピー文化がたっぷり残っていた。港にはたくさんのハウスボートが浮かび、皆船の上で生活していた。海沿いのボードウォークにはいくつかの美味しいレストランもあった。

ムッシュは日本を代表するミュージシャンを連れてきた。ギターは今剛、キーボードは難波正司、ベースは高水健司、ドラムスは島村英二。バンドの名前はOne Night Stand Brothers。レコーディングはほとんどワンテイクで、いわゆる生録り。その中に何人かのアメリカンミュージシャンも参加していた。ハーモニカはスティーブ・ミラー・バンドのメンバーでもある、ノートン・バッファロー。そしてフィドルにはダヴィッド・グリズマン・バンドのマイク・マーシャル。この二人が一緒にアルバムに参加しているのはきっとこのアルバムだけだと思う！　これをまとめたのはロスのトップサウンドエンジニアのスティーブ・ミッチェル。彼らがここで作った音楽は、スタジオのトリックを使っていないストレートなロックだ。しかし実はマイクは最初に来てくれたフィドルプレイヤーではなかった。最初に来たのはプレイヤーを探している時、スタジオの若手エンジニアがすごいと言って、呼んできた女の子だ。彼女は間違いなくすごかったが、それは抜群なスタイルと黒いミニスカートのすごさで、残念ながら彼女は全然弾けなかった。そんなとき、たまたま近所の楽器屋で出会ったのが、マイク・マーシャルだ。そんなこんなで、このアルバムはレコーディングからマスタリングまで、わずか2週間でできあがり、ミュージシャンが遊んでいるような、楽しさがあふれているオリジナル曲だらけの一枚となった。

僕はこのレコーディングのコーディネートをつとめたおかげで、もう一度、音楽に目覚めた。時代の流れに乗っていない、ピュアで正直なロックが僕をもう一度、音楽の世界へと引き戻してくれたんだ。

ジョージ・カックル●60～70年代のロックに精通し、ラジオ・パーソナリティとしてインターFMや東京FMで活躍中。鎌倉出身・在住。波乗り歴40年の親父サーファー。
www.whatsupmusicinc.com

©George Cockle / On The Board